



日本語学習者によるピア・レスポンスの会話分析： 問題点指摘を起点とする相互行為に着眼して

著者	吉 陽
発行年	2019
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9249号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158149

氏 名	吉 陽
学 位 の 種 類	博士（国際日本研究）
学 位 記 番 号	博 甲 第 9 2 4 9 号
学位授与年月日	令和元年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本語学習者によるピア・レスポンスの会話分析 -問題点指摘を起点とする相互行為に着眼して-
主 査	筑波大学 准教授 Ph.D. (Japanese linguistics) ブッシュネル ケート [*] コンラン
副 査	筑波大学 准教授 Ph.D. (Linguistics) 高木 智世
副 査	筑波大学 准教授 Ph.D. (Linguistic anthropology) 井出 里咲子
副 査	筑波大学 准教授 木戸 光子
副 査	筑波大学 准教授 博士（言語学） 関崎 博紀

論 文 の 要 旨

本論文は会話分析という質的研究法を用い、共同学習の一種であるピア・レスポンス（以下 PR と略する）における問題点指摘に着目し、学習者がいかに問題点指摘を達成するか、またそのやり取りを通してどのように社会的関係を構築していき、どのような学習を実現するのかを検討するものである。会話分析による先行研究では、PR 自体に対する研究はないものの、その他の制度的場面におけるアドバイスをするという活動についての研究は数多くある。会話分析によって、アドバイスをするという活動のプロセスがかなり究明されているだけではなく、アドバイスをするという活動がいかに文脈や参加者間の能力の差、アイデンティティに関わっているかについてもある程度明らかになっている。しかし、これらの研究はあくまで PR におけるやり取りではなく、より一般的なアドバイス活動を見ることに留まっている。一方、従来の日本語教育に関する研究では、PR を見る研究が多くなされている。その中で、PR の結果、つまり PR を通して推敲された作文がいかに向上したかということを検討するものがほとんどである。また、発話機能や社会認知的な観点、および語用論の観点などから PR を分析するものはあるが、PR において読み手がどのように問題点指摘を行い、書き手がそれをどのように受け止めるか、また参加者がどのように協働的に問題点指摘という活動をやり遂げるのかを具体的にしているものはなく、不明である。したがって、本論文では PR における相互行為に着目し、とりわけそのプロセスに主眼を置き、どのように社会的関係を構築するのかについて緻密に検討している。

第1章では、PR の定義や日本語教育における PR に関する研究を概要し、本論文の研究目的および研究課題について述べ、論文全体の構成と内容について示している。続いて第2章では、PR のプロセスに関する先行研究をまとめ、残された問題点を整理している。さらに、会話分析による制度的場面でのアドバイスをするという活動に関する研究を概観し、会話分析という手法を用いて PR における問題点指摘という相互行為を分析

することの可能性や有効性について示している。

第3章では、本論文で用いる研究手法である会話分析およびその関連の概念について説明し、また、本論文で研究対象とするPRの調査概要、分析データの概要を述べている。具体的には、中国の某大学における日本語作文の授業で、学生が授業の一環としてグループで作文の推敲を行なっている場面をビデオ撮影及び音声録音をして、それに基づいて文字化資料を作成している。そして、そのように入手したデータを次の第4章～第7章で分析している。まず第4章では、PRにおける学習者の対話を分析し、読み手がどのように書き手の作文に対して問題点指摘を行うのかについて考察している。その結果、読み手が直接に指摘を行う場合がある一方、直接に指摘することを回避する場合もあることが明らかになった。直接に指摘を行う場合、「修正案を提示する」「ほかの参加者が反応する機会を生み出しながら、特定された箇所における問題点を述べる」という2つの手続きがあり、間接に指摘を行う場合、「問題箇所について、書き手に説明を要求する」「問題箇所上昇イントネーションを付加する」「問題箇所の妥当性について確認を求める」「ほかの書き方の可能性を探る質問をする」という4つの手続きが使われていることが明らかになった。また、問題点指摘の行為を開始する手続きには、1) 問題点指摘を開始した人が書き手のフェイスを脅かさないように常に慎重に問題点指摘を行う；2) 問題点指摘を開始した者が問題点を指摘し、書き手がそれを認め、自ら修正を試みるように問題点指摘をデザインしていることが観察された。

第5章では書き手がどのように指摘を受けとめるのかを解明することを目的とし、課題1) 指摘を受け入れる場合と指摘を受け入れない場合にそれぞれどのようなストラテジーが使用されているのか；課題2) 書き手はどのようにして日本語能力が否定されることなく指摘を受け止めるのかといった2つの課題を設けて分析している。課題1) について、書き手は指摘を受け入れる場合に、「指摘を明示的に受け入れる」「書き手自ら特定された箇所の問題点に気づき、修正案を提示する」という2つの手続きを用いる一方、指摘を受け入れない場合、「拒否する理由を提示する」「明示的な反応を示さない」「教師に意見を尋ねることを提案する」という3つの手続きを用いることが分かった。課題2) について、指摘を受け入れる場合、書き手は問題箇所が自分の不注意によるミスであることを主張し、または自ら修正案を提示することなどを通して、自分がほかの参加者と同等の日本語の知識や能力を持っているというスタンスを示している事例が見られた。一方、指摘を受け入れない場合、書き手は自分が作文を書いた時に、ほかの参加者に助言されたことを考えたが、自分の作文の状況を考慮した上で修正を加えていないという指摘を拒否する理由を提示することによって、自分はほかの参加者と同等の日本語能力を持っていることを主張する事例が観察された。

第6章では、問題指摘におけるトラブルを解消するための連鎖を考察している。結果として、「ほかの読み手」が問題点指摘の連鎖に参加する状況として、主に「指摘の内容が不適切であるという問題に対して」「指摘の連鎖の進行が停滞するという問題に対して」「問題箇所に対する修正案が不十分であるという問題に対して」という3つが確認されている。また、ほかの読み手がPRにおいて重要な役割を果たしていることが解明された。第7章においてPRにおける学習の実態を解明することを目的とし、課題1) PRにおける問題点指摘のやりとりはどのように作文の修正に影響をもたらすのか；課題2) PRを通して読み手同士の間でどのような社会的関係が生まれるのか、という2つの研究課題を設けた。課題1) について、「読み手が問題点指摘を行う→書き手が指摘を受け止める」といった完全な問題点指摘の連鎖ではなくとも、読み手と書き手との相互行為を通して、可能な問題箇所や問題点が明らかにされることが可能であることが解明された。さらに書き手は読み手の指摘に反論すべく、作文で含意されているもの、明示的に言及されていないものを自己開示によって表面化し、作文の修正に繋げることがあると示唆された。課題2) について、「書き手」と「読み手」の間だけではなく、複数の参加者がいるPRにおいて、読み手同士の間にも様々な関係が形成される可能性があることと示唆された。また、参加者間の関係が固定されているわけではなく、常に変化していることがわかった。

審 査 の 要 旨

1 批評

吉氏は、会話分析という質的研究法を通して、現在まであまり見られてこなかった作文学習活動の一つであるピア・レスポンスにおける相互行為を綿密にみた。先行研究では作文の授業などにおけるピア・レスポンスの結果、つまり作文における文章の形式やその内容、構成がいかに向上了か否かに関する研究がほとんどである。それに対して、吉氏はPRにおけるやり取りそのものを非常に緻密に分析することによって、先行研究ではほとんど考察されていない学習過程の側面を明るみに出している。具体的には、PRやり取りにおいて、主な活動となる「問題点指摘」がいかに関係され、行われ、そして収束させられるかを発話順番単位レベルで示し、その流れの中で当事者がお互いにどのような配慮を示し合い、どのような社会的関係を構築し、それもPRにおける学習という概念の中に含めるべき要素の一つだと主張している。また、1) 作文の表現や内容そのものにおいて改善がなくても（また、逆にそもそも問題のないところを間違った方向で直してしまっても）、PRのやり取りを通して貴重な学習が観察されることを、実際の相互行為のデータを提示しながら説得的に示している。よって、PRという活動は作文の改善のためのものという限定的な捉え方を脱し、PRを行うことそれ自体に価値を見出していると言える。そして、2) 先行研究では全く視野に入れられてこなかった第三者の役割（＝問題指摘者以外の読み手）を示している。このいわゆる傍観者は書き手と問題指摘者の読み手とのやり取りが効率よく行われ、お互いに相互理解・間主観性が実現できるように仲介し、また独自の見解を提示することによって、PRの中での学習をさらにサポートし促進させることを示している。

一方、本論文にはいくつかの問題点も認められる。データの量に対して分析がまだ荒削りになってしまっているところも残っている。また、データに繰り返し出現する現象（例えば、コードスイッチングや参与枠組みの構築・再構築など）について十分に考察が行われていない部分もある。ただし、全体的に見ると完成度が高くなり、また新たな研究課題をいくつも提供している貢献度の非常に高い研究のゆえに、博士論文としての価値を損なうものではない。

上述の問題点に関して、吉氏自身も十分自覚しており、今後一人前の研究者として活躍して行く中で、それぞれに改めて取り組み改善をもたらし、発展させ、輝かしい研究業績に結びつけて行くと思われる。

2 最終試験

令和元年5月21日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。